

年明けの1、2月はコロナの勢いに押されて残念ながら休会。参加者の減少が心配でしたが、常連8人が元気に顔をそろえ、再会を喜び合いました。第24巻の舞台は四国。越前の戦いに破れた脇屋義助の今治上陸で幕が開き、伊予の武士、大森彦七が楠正成の怨霊に襲われた話のあと、阿波・讃岐からの足利方細川勢の侵攻で南朝方の四国制覇の夢が潰えてゆく歴史をたどりました。

◇この日の輪読箇所は次の通りです。

(一) 義助朝臣予州下向の事

義助の渡海成功 (p73, 74~76)

南朝は、九州を含む西国を視野に入れた戦略展開の足場として伊予の制覇を、新田義貞没後のトップ武将、脇屋義助に命じた。義助は高野山に詣でた後、紀州田辺から船出し、熊野水軍の援助で、淡路・沼島、備前・小豆島と南朝方の水軍拠点を経て、無事、今治に上陸した。今治は国府の所在地で、伊予の政治、軍事の中心地。その地に義助を迎えた伊予守護・大館氏明らの四国南朝勢の氣勢は大いに高まった。

(二) 正成天狗と為り剣を乞ふ事

怨霊の出現 (p77~80)

伊予・砥部の武士、大森彦七が猿楽の会場に向かう途中、道中に難儀している美女に出会う。背負ってやると、やがて鬼のような形相に変じ、彦七をつかんで虚空に引き上げようとする。大声で家来を呼ぶと、化け物は消え、彦七は深田に倒れていた。

怨霊の要求 (p80~85)

目を改めて催された猿楽の演半ば、舞台上空に稲光がして黒雲の中から百騎程の兵を率いた武将が現れ、楠判官正成と名乗って、彦七に秘蔵の剣を差し出せと迫った。その剣は壇ノ浦で滅んだ平家が持っていたもので、足利を倒すのにどうしても必要だという。

怨霊の調伏 (p85~88)

剣の奪取は勅命だからと、正成はその後新田義貞ら他の怨霊の加勢を得て襲来する。彦七は足利氏を裏切れないと、頑強に拒否するが、ついに物狂い状態に。僧による般若経読誦でようやく怨霊は退散した。

(三) 河江合戦の事、同じく日比海上軍の事
(四) 備後鞆軍の事

金谷経氏のゲリラ戦 (p95~101)

南朝期待の脇屋義助だったが、今治上陸後まもなく病没。すかさず足利方の四国大将・細川頼春が、阿波・讃岐らの兵を率いて東方から伊予に侵攻、まず、国境の河江城(川之江市)を襲った。その後方攪乱を狙って、南朝方の金谷経氏が燧灘に兵船で出撃、細川軍と海戦を演じた。劣勢となった金谷軍は矛先を転じて、対岸の備後・鞆を急襲、鞆方面での陸戦に入った。決着がつかぬうちに河江城が落ち、細川軍は大館氏明の籠る世田城攻撃に向かうことがわかり、金谷軍は再び伊予に向かう。

(五) 千町原合戦の事

(六) 世田城落ち大館左馬助討死の事

伊予南朝勢の没落 (p101~107)

伊予では、世田城に近い千町原での騎馬戦となり、金谷らの南朝勢は奮戦するが、兵力にまさる細川軍の余裕のある戦法に消耗を余儀なくされる。そこで、頼春は今治方面の南朝の主城、世田城を包囲して総攻撃に転じ、昼夜十三日に及ぶ激戦の末、ついに攻め落とす。氏明主従十七人は枕を並べて討死した。

※新田軍の別動隊? 新田軍には、河江戦の後攻め(後方支援)に登場した金谷経氏の軍勢のように時に、本隊の別動隊と見られる戦闘集団がみられる。備前・熊山に挙兵した児島高德、越前合戦の畑時能らで、陽動、攪乱、援護などに活躍したが正体はよくわからない。

第26巻輪読予定ページ(5月17日)

- 1) 167 また、仁和寺~170 なりにけり
- 2) 173 楠帯刀~177 帰りにける
- 3) 177 今年、古へ~181 出だしたりける
- 4) 181 資明卿~182 仰せられける
191 大納言~194 なかりけり
- 5) 194 その聞こえ~196 申すにて候ふ
198 つらつら夢~199 付けられける
- 6) 200 去んぬる~203 満ちたり
- 7) 208 今年、両度~213 向かひける
- 8) 215 さる程に~217 引いて去る
218 佐々木佐渡~219 引いて行く
- 9) 231 さる程に~234 なかりけり
- 10) 234 さらばやがて~238 有様なり